

三重

2017年2月1日

県警初のデジタル技官が活躍 科捜研の蔭山さん

県警科学捜査研究所（科捜研）で昨年十二月から、県警初の電子情報工学専門の技官が活躍している。事件解決の鍵ともなる防犯カメラの鑑定件数が増える中、蔭山享佑さん（25）は新人ながら専門家として「情報処理の技術を捜査に役立てたい」と力強く語る。

県警本部の一室。防犯カメラに映った不審車のナンバーを識別しようと、パソコン画面と向き合う蔭山さんの姿があった。防犯カメラに映る不審車や、容疑者特定につながる画像の鑑定を担当している。専用のソフトを駆使して、画質の悪い防犯カメラの画像を鮮明にしたり、画像のゆがみを補正したりするのが主な業務だ。犯人の特徴をとらえ、逮捕された人物の写真と一致するかどうかを調べる「異同識別」にも携わる。

和歌山市出身で、立命館大理工学部に進学し、電子情報工学を専攻した。四年の時に教授に誘われて、盗撮を防ぐ技術開発の研究を始めた。一定の空間で発光ダイオード（LED）の明るさを変化させることで、スマートフォンのカメラ機能を使えなくする技術を考案した。

「身近な犯罪を減らすのに、役に立てるかもしれない」。大学の職業案内で科捜研の仕事を知り、物理科の技官を募集していた三重県警の科捜研に応募。十七倍の競争率をくぐり抜け、昨年四月に採用された。

警察庁の科学警察研究所（科警研）で研修を受け、科捜研では十二月から本格的に働き始めた。火災の出火原因や交通事故の経緯を調べるため、現場に駆け付けることもある。「これまで身に付けてきた知識や技術を生かして、安心安全な街づくりを支えていく」と意気込む。

（大島宏一郎）

〈防犯カメラ画像鑑定〉 2015年8月に大阪府寝屋川市で中学1年の男女2人が殺害された事件など、防犯カメラの映像が容疑者の特定につながるケースは多い。県内では、昨年12月に志摩市内のコンビニ店で発生した強盗事件で、防犯カメラの映像が容疑者の割り出しにつながった。科捜研によると、防犯カメラ画像鑑定の件数は15年で95件。11年の43件と比べて倍増している。



県警科捜研で、防犯カメラの画像鑑定に携わる蔭山さん＝津市の県警本部で